龍十論衆議

全

へ5
2962

門へ 5
號 2962
巻

俳諧十論衆議

信枝房

むかし我師盧元房奥羽行脚の駕を画一庵に
とゞめし時我堂に十論の講習を窺ひ給ひ
師の曰十論とは文の明なる傳とは解とはよく
為辨物の委曲なる今はしに言の加ふるさなし
若し熟讀しく會せはしらふあらはなほ衆議
をへしとなり此言深意あり早竟ハ十論を
よまはしてゐるを為なれハと我堂衆議して例の
孤筆をはぬやまりの若干におよへりそれか中

○十論舟後

より繼ぎまくりて画一庵にいたむるまゝに
全く後輩の為にしたくお宰の心得なりし所に
不ぞ此書をとゝんて言書を讀ゐ全く言書を
讀てこれをとゝんるに及ばしん

佻諧十論 附序

○あるとし武江の芭蕉庵にて茶話禅といふ
録をあらはして吾爲の行状をあらはし家家の風雅を
ひろめんと文を論語の述而にならひ故に維广の
向疾に書をくへて此十論を爲に稿せしに故に
例のゆゑし給ひ

貴議云佻諧の二字爲在世に時勢をもとりて
佻諧誹諧とも用きたり東を先師に取りて人篇
の佻諧に定る十論は第一佻諧傳 第二佻諧道
第三佻諧德 第四虚実論 第五姿情論 第六

○廿論解説

佛諧地第七修行地第八言行論第九変化論
第十法式論也附序ハ本文を主とするこの意なり
此一冊ハ本文を終にあけて白圏を作りとも
序のミ本文の係なり相文得のあるとしは
貞享の末元禄の始なるよし芭蕉庵ハ東武
深川にありて仰頂和尚の禅刹もそこにあるとし
其ニ為辨抄ハ獅子庵ニ十論講筵ノ辨全部三巻アリ其禅刹ハ
今の林泉寺なり故義ハ例のやうし
ハ此衆議ニ例の字ニ為義のこまをとけしく
篤実なるといふ但ニ為義在命のうち其

り抜をあらはし其道をひ結めむことくと
志めて悼みたるにあらはしたるを故ニ為
義滅後三十年にして東花坊時勢をもとりて
此十論を其ニおこなるにて知るなりしなり
論語述而の篇維广の問疾品ハ解ニむかり解ハ十論
ノ附録ナリ衆議ニ解ニ云トアルハ皆其書ヲ云
○今や世間の佛階とみるに其の事に本の有出るかとき
人のちからとりて苅にくもへるに我いふ佛諧ハ
文解ハ義に出ことへく例のおしく例のおひく
義和事白の世情にあれひて人のかしをやへはらんは

是ある物のおこなはれをとつゝるすなし

衆議云世間の俳諧を高尾滅後門人の各得る

所より変化し新に相ひ奇を好三弱乱して

道を失ふに以ゆゑ苅ほくまへうれは歎息の

意の多しきなり我かつゝ俳諧は世弱乱する

俳諧にあらりて友那各扉の高尾の語をもし

あるをおうしくあるをさひしき鹿宮を

勢ふ所を以へり此所は解に古詩あり花子李

白人間夏猶枕空携忘世情此詩をもりて

忘世情の忘を拒の一字にかへ俳諧にある高尾の

はなきをあらはせ世情の人にゆゑしいりて訊諫は

道あれはおこなはれをといふことなしと拒の一字

に十論をぬくこそ不のうた其道を説ク源氏次ナ

の巻に女御かぞまくられぬふを悦ひぬふとあり

愛なき人を教にもせしは俗なり

○我より人をせもめんとをかへりて人まにくまれな

む情をはくむに光あれはと口金の変をおそりしより

持りのはなきに及ぶりき此故に此論をも多暮三ヶ

語のまゝに柳子庵の遺稿にをしまるや

衆議云なるにおのてこれの十論を世にたこ

なふことをゆるし給ハけりしその故を思ひ
あたりなる文章なり此本の故なり故語は
解に出たり名頭暮三は莊子に名四暮三の
手段をとなれておりしき名なり解に芭蕉
庵に名言の小坊主とありて此間の餘播の旅
ハしきに今一紙をなして疎もやまいしこと
なとあり或は化人ともいへる
○けれは世の変ハ三十年にして生住あり異滅
ありとや此論もしや私なりんなれ永く三祢の
冥意を加ふめ我門の風雅を世に伝ふへけむ

例に佛語の虚実なから例に文章の過當なり
論に以るへく論に惜るなし
衆議云解に生住異滅変ハ今月の変なりと
あり志なる時は言葉の滅後佛語の務ハ此なり
世に住することを三十年にして此変あれハ今
既に十論と世に行ひ訶むへき時至れりとなり生住
あり異滅ありとやのや文字ハ頃の旬へ此かけて
今の佛語の世に行ひ屋きといふ此論もしやの
や文字はしなる意なし若は假設ノ辭此
所は私なしと至て。私なし若や私なりんなれ

されバ以下ハ撰者の我をなのせたる沙汰なり
まづ撰の詞なり されバ撰者の信とするべし
適當の二字ハ辨おかれて詞の縁急ニ十論
一部ハ其ことわりあり

第一俳諧ノ傳

○抑も俳諧の傳といふハもろこしの史記に滑稽の
名ありて齊楚の比より秦漢の間までに七八人此
言行をあらハしたる史公の天道の贊詞より或ハ笑
言となりて天道にかなふもあり或ハ謔笑となりて諷諫
ともなる滑稽ハ酒桶の喩なるべし 俳氏ハ俳諧の

ことごとくいへる畢竟ハ虚実の自在より言語に
あらはるのいはれなるらん
愛箋云 俳ハ前後相對なり其俳するハ和の道ハ
自然のありしく虚実の妙なれバとて俳の次才
本文に詳なり
○俳諧ハよし儒佛とやはらげ賢くは詩・哥の媒を
なすべし
愛箋云 傳ニ曰 傳ハ廿論一條ごとの末ニアリ故ニ此條ノ傳ト云 此一條ハ俳諧の根
なる所にして儒佛老の三道よりも差別の
なきも帰する所ハ虚実の妙なれバなると

一首の附代今の俳諧にふくと

○十論辨

今や俳諧の一道となりて虚実と初ふ媒をいへる
媒の一字より十論とはくしらく此法に時宜の二字
あることと信ずるしてあり事に道と媒といふ
も時宜なることと知りて十論は虚実より其の
時宜とその上へきなれは媒の一字より十論とは
くれとなん凡道ては一なれとも猶も所あるし
かれも道のことも所をもちなくの文章より
ことわり詩哥連俳の風雅あるからしめて
猶かくといれしして媒といふれ其意は道と
云ふ此のんなんやもを爲辨ねよ委し

○やしても法式さも新旧の差なお口傳あれは芭蕉
家の書はさん人倫の俳諧と用へしと白馬よ
家訓の一條にもあり

衆議云爰た此口傳とて又十論より十ヶの
口傳ありみその口傳の趣を傳解及ひ辨ねよ
おもり熟讀しくて知るへきなり傳に曰
今も俳諧と誹諧すた新旧の名とことらて
天蕉の一道と建立まと為辨ねよ爰た
言偏と人偏とのはたも十論一部の大口
決とあり我黄の要議さん此元を云ふもの

詳敵と看破して濱に人倫の仇諸ある仇
石の世におこなはり無き舊門の大聖なりとて
○けて文明の比なるん山倍の宗盤法師をこそ
離諧の名あるより守武壁一もなれとそなひて
百韵とはこそ千句とはしぬ
愛議に宗盤法師以下の名譽あり宗盤は
作る木隠岐前司義清の末童名弥三郎
始一体和尚にはかふ後接石山倍に聞者を
守武は荒木田氏なりしく伊勢の神官壁一は
同く伊勢の産なり貞徳は松永氏或は

長頭丸といへるはこれ年ゆるはしらひて仇諸も
目をあがりけれと自の戯号なりとて
貞室は安原氏宗の産なり貞徳の門人に
なりて宗通の名とはいふ其門人より
宗拝作といふ集ありて貞室の仇諸を
そしるあり又大津の連中より謂ひとふ
集を出しこく宗拝作をかつ宗拝作を
季吐を人の後楯なりと疑れて小型へ祈
拝言の奉納唱しぬ人神も信を小所毎とあ
りしは世所のるまなりとて思ふに貞室此

似諧は世間にも吉野山と隅田川の春句を称
しなく今の似諧は相伝しとあれば素抄
作のせしつゝにおよりぬことをお弟子の妬と
つゝくせらり早竟は一分の我慢より師論
と思ひける故なり

○せのうち難波の宗因は武隆は檀林の額うらく
説諧の温覚は破りこれと耳は言語のおりしこと
ゆゑく眼は姿情のさひしさをしらねば先もさる
にさはなしといひしさはなしは時にさ御なし御
なりんとはせの弟子もあらば

宗因は大坂天
波西山一迷雪西翁
又松翁とも紹純の
門人乙近金年中
我江ニ下り暫く檀
林一流と云

衆議云ゐ辨おは宗因は春句も所句もこなく
詞の拍子のこゝにしてそのふへき通なられいそれ
と恒口にも檀林性しとも叫ぶて其時は風雅の
人とそふとありて宗因の春句あり古風は
作習の言葉の言あり辨はつゝへきなり我
堂志の衆議にはい宗因武者奇伝の老頂と作
はりて句はきゝんく八幡は帝部云 是
きゝんく八幡きゝんとつゝ俗語の拍子は加て
八幡は帝といつきときゝんくの言語とは
かい様我作りの云事ゐうせ八幡は帝は人

きとりひなんと又蕉門いろは武者の句をもて
次の情に其活の遠ひあるをとてふる無れい
事に略を体に中古の仏諧に人をあるのみなる
故に其師なくなるの才子もなし今や此論に
其道をあらはし其法をしるより次の情の
論定りくそのふへき時至れり法れと仏諧と
ひ行むる人の十論を知らんなら蕉門の
仏諧とても其師なくて才子もなくんしも
りしに道の真摩を此十論にある事を知る
事し

○今いふ仏諧とは唐虞の先につかれて其名は
旅川楚の後にあらはれ其風を和漢の一派となり
ぬ

要議云唐虞の先は儒仰者の名もあらはれ
そこに道の体なる和を知りて今に体なる和
を知らず仏諧の名にはなきなし傳に曰
天稟の一道を建立せしあり狂為辨相に
詳なり

○古池の鉢に自己の眼をひらきて風雅の正道を見
はけせらん事を天よりうけはきて自悟とも自

詩をもいふ事をせずにいふ就諧をもいさしきは俳諧ハ
よし芭蕉庵とえ祖といふへし
愛議云傳ニ曰かくて天和の頃ならん武江の深川
に隠遁しく古池や蛙飛のむかしの事
いへる幽玄の一句に自己の眼をひらきてそれより
俳諧の一道をひろまりはるとあり誠に
此一句は世人の世に行はるし始めしとく
其道に手法を導くなれ
なれる且十論は此一句より説出せし此一句
にいふ事なる今や蕉門に見くに其

俳諧此句の次の事を作くて疑ふ所なし

第二俳諧道

○其も俳諧のみといふは第一に虚実の自在より
世間の理屈をよくそなれて風雅の人理にあらふ
といふ也誠に俳諧の寛活なりを人にして此人
ならんなり狂言綺語の假(アタ)るのならんに虚実此
間にんとあはれしむる言語の設と案とあらへ
愛議云人に俳諧の二字を見せる始めしく勿論
世に俳諧の道と説たりしも其也第一に虚実の
自在とは虚実の設の通れるなり道に虚実

此說にしく虛實を實とものて淺くろふ事なく
實を虛とものてかどく不虛實の間に心を
あそりしむるといふ事なるべし
但し虛實の說は虛實の外に物ありて虛實を
說にあらず虛實を說もその虛實なれば
虛實の虛實といふことを道の奧旨とす
本書第四臣虛實ノ論のむ文にみえたり
而言語の說とは假令は人の心をもてなへんにも
我身のうちをもてのまんにも先にいふへきを後に
し後にはへきを先にいふ所はさまの調

ぬることく舞句にも一句の姿をもてなりは人の感
はるはへくなし舞句といふ附句といふ趣向を
先にし句作を後にしあるはおりしくあるは
さひしく虛實の間に心を拒りしむる言語の
拒ひは限なりんむりし東を先師西を主とその
附合に
今時は何といふなる淺りなる
宗祇と二人り亭主大を燒
弟句はさきなるのかを見るに何といふ
なるの言葉の僧なるを說きて連哥の宗祇

と趣向を定むるより亭主大を焼の勺作りて
次ぬを旅庭の俗ふる余情は二勺の間にありて
山家の菜色に知るべきなり

○けてさはに三條あり世情の人和は五倫の常法
ましておかしきは佛諧の名とあるべくけひしきは
風雅の所とあるべし

衆議云傳ニ曰道に三條の法ありて儒に似て
其實を説ければ佛に似てさ虚としてあれ
ばしく老莊の理非とかけけんまた是を
中庸の法にしく愛を佛諧の大宗師と云

るしとありお文及傳ゐ辨おもふしく
世ましを祥なり熟讀してまこゝを知る
べきなり

○此段に吾等は行下に十哲の名とあらへ天下に
三千の徒あれども人にむかひて佛諧とも名を
其人の信に求めも法を我身の功を法にして武江の
名に居に在なり佛頂和尚の禅室に陪しかり
投子一碗の茶に求法を法とりて佛諧のたこひ
と口傳知れるより

衆議云世ましへお文佛諧は心の抜ひあるを考む

るしとき言葉行状のあらましや様に
熟讀すへし投子一碗の茶のるゝハ俗語の
肝要にして人事のいとけなりを書にて
了智すへきなり都て我當の所議ハひとゝ
後案のゐなれハ一座の句語と云ひとゝるつゝる
人用捨あるへし此院の傳に投子一碗の茶の
話則ありて趣を投子一碗の茶と題しく
森羅万象此うちにありといへるとき才子の
その茶を打あけて森羅万象いけくにあると
清ちきより投子の茶に可惜一碗茶とあり是

才子に一碗の茶の虚にすきとすゝめたるを程
居にすりあけ打あけきる力味とあしらん
なり常底の茶にもとりたるなきに茶生
とうしなりて俗語に三勺目のそこひと知る
へき所なり後茶に稱ひ茶の事へきに早竟
茶の二勺に法問にて三勺目の茶を茶生の茶
なれいとなりて変化に姿のうつりと知るへきも
此所を俗語にそこひの大事なるべき文及
傳等に祥なりの辨なれハ舞勺招ありて法
問の趣より俗語に大小の設ありと用ひて

ありへし我豊の衆議にて越中井波の僧侶に
来ぞ先此此等の前句に言葉の三句目あり
衆議と思ひしより家に出ぬ此此知る
所なり此はある舎の附合に来生へもとはの
所を議するあり言句は
萩萩の露に乱るを辷り 石
そのまゝの意と追ふて松 四
此等やおの二句を伊勢物語の体にて似るよひ
て三句目のむかしかりしと次の作を花の様の
雄松とこゝにてよりつんく例のまえに所句と

求れるあの對松はと思ひる人ありてをれる言葉の
意へとつんゆるに言人をそこく趣向とし
年紫の中へ移る程中をうり
も附きハ前句に追行對雲とそれといふんも
ふ逆意なるに庭の時宜も何なきんやつぬ
年に中々かりは此に年紫の来生なるともて
そこに雑所をもとりきれるに次に茶にて面にも
そこひやそしいふなり
○をもやけ石の功と論をは儒仰老荒の靈宗とあ
はひ諸音連音の理とおとおて国にいさむる

居あれば家にあらはれ子あるうことを仇諧は天下の
一助に侍れてつゝへし志れども仇諧の人を宮(ミヤコ)所に
まちのどにはせいれ田舎の秋の塵にまりしはりて工家
商店の志に侍ようとかしは酒肆婬房のあそびに
くらうは

衆議云爰に世道の功とあらはし詩音連音
に對して仇諧の一家を立る不及ばこるゝは此
徳におこりこれを秘子庵の智にひろまる共に
世濟の才を作くるしとて此末向上の一路のこ
ありんと用いてゐるへし爰に諫臣華子と

此酒肆婬房のあそびにくらうはとゝ
將ゐるまゝ事なるに此所は一大事にして此所の
手を放此不早意ゝ虛實不自在にて訊
諫の道行はれはなり

○爰に云へは吾等はせまく人を誨るとて仇諧は
是ねのせまのしまとしくらは語は我家の遺金ふ
らゑとおよそのくの事過をへきとや今もしく此
意を論ずるにあるを時は是おほくよ後所にあそび
やとうんに是ゝ世の人にまりしはるへきを世に此仇
諧のこまれはそと虛實の媒にして世情の人和(とは)いふも

○卅論衆議

衆議云為辨抄者なり楽の下雅波の遺跡七
通ありそのうち者なり楽の言葉あるもの三通
あり高尾遷化ハ元禄七甲戌年十月十二日なり
芭蕉翁雞波ノ旅店ニヲイテ遷化遺骸ハ江州木曽寺ニホウムル然シ
ヨリ以来年回ニ當テ東花先師法恩ノ雅筵ヲ開キ諸国ノ連中ヲ
會ス就中十七回忌ニハ洛東双林寺ニヲイテ石碑ヲ造立シ假名ノ銘
ヲ製ス且梨園法親王ノ尊命ニヨツテ獅子庵ノ白狂教令ノ文ヲ
書ス碑銘ハ謎文ニシテ漢家旧法ニナラヘリ
本朝ニ假名ノ碑銘ノ始ニシテ蕉門ノ眉目ナリ 尚遺文七通の内遺
物の遺跡あれて東花先師へ出山佛の像を仰像
今洛東双林寺にあり 為辨抄ニ出山佛ノ像古今ノ序傳百人一首ノ
秘文抄東花先師卫形見トアリ出山佛ノ
像ハ十七回忌法會ノ時双林寺ニ奇附アリシトナリ但十七回忌ヲ東花坊
カ吊ヲサメトアリ其翌年先師亡名ノ年ナレハナルヘシ寛保三癸亥年
五十回忌ニアイ當盧師同双林寺ニヲイテ三益夜ノ大會ヲ催サル此時
ニイタツテ日本六十余州国トシテ法恩ノ雅會ヲ催サヽルハナク所

トシテ追福ノ奠章ヲ捧サルハナシ盧元房花供養ノ選集アリ其
撰半ニシテ盧師遷化ス因テ五竹房次テ選之全九巻アリ
傳ニ曰君知るや此論の要なる不ハ道に一字の信
を志ゑし法にあらねのなれしことゝ以ゑる日
夜に忘れて抱ふへく明るに到れてなるのしむ
なきをなさし此俳諧の一道あらんとあり諸に
今の俳諧は虚実に道のみを傳へて言語此
あやに人天の奥とはくし雅俗一様の抱戯なる
ると信ずるしとを
才三俳諧ノ徳
○おもし俳諧の徳といふ事なり理と理屈と此二名より

人理を捨て天理に志るかふとゝいふなり

愛議云今日人理と捨て天理に志るかふとゝ云

陰道の論に世間の理屈を能くとゝなれて風雅に

天理に捨ふとあるに同しかより道と理とを

其理一なり信しくこれに捨ひあるけれども理と

好けらんや天理に随つゝやすく理屈にかゝれ

者し故に其句に祈らかして理屈をいふ

其理屈なる人のなりて道理にあひくなり

其人の理を知るへしとなり

○此て他諸の理なりや文にやはらき武にいるむ時は

仁勇の二にして智は其理とあらはれ故に志るも仁勇

のかなりと志るへしされとも智は二ありて世智は

仁勇とかはかなり真智は仁勇を内に捨てむたとへ

張良か女児の如なりに志るなり

愛議云此段の解に漢書ノ賛ニ閔テ張良カ之智勇ヲ

以為ニ貌ヘリ斟梧倚偉ナラント反テ若シ婦人女子ノとあり

これ仁勇を内に捨てして張良かつんりと世と

の違なり世智は例の志るなりし志るなり

にて口傳にそらしかしかしせるに他諸師も

あらん昔山崎宗鑑と接政云笑ひなりて　宗鑑か

姿とつくれば、かきつくしと宜しもつくるとやうの
道なりとさだめ。桜花の詩なるを宗鑑の席に詩
く「背かくて姿おかしん杜花とありしにみるの
がんがらくのありさま姿なかるべし
○志るは俳諧の風雅をなすより詩は連歌をもて
詩歌連歌に敵をもれ、水の流よりもなほやさしく柴
の末といふへしとぞ
露沾云俳諧を諷諫と一致して高下の情を
かけ、詩歌と詩歌連歌にあらさる建門の
意地なりさても文字ありて或は徳の基を

もて或は徳の潤色とし或は詩歌の情におよびんと
あるを用ひてよし
○それ道理と理屈とは道理は全く善にして理
屈は全く悪なりしをいふ道理は善と悪
ありて理屈はひとへに悪なりねたましくして善悪に
善悪の二あらんとやとあれ十分の道理あれとも君
父をあしさまにあらそはれむに君父にさからふべし
道理あれは理屈ずなくもる道理なれん志るにとか
れたる道理をまげて君父とらむをのりなとなりとあるは
道理の悪なる物なれや

衆議云爲に理と理屈とかて今の仏階に
世話とあれかふ言ゐのあきらかなる十論に
言の加ふへきなしと我所のいへるともなりひ
合そへしけれと我當ゐは後輩の爲なれ
と例の私さる衆議おふしき中に浮世殆の
贊に諫めりき殆ぬ雨のお傘にむけ一本の
あしらんなりに

合点しく世爲まよへ正さく

諫云世贊合点して速へとは一理屈かまへる
世句をへの字とふの字ましして

合点しく世爲まよふ正さく

ともあらに合点なりに逆ふとは誰も云ん此
あるるしてそこに私入る余話もあらんとも
諫に仏階を爲にめとめて自抑自揚の傳
より世いふ諫公とはまれされとなり又或會
の衆議に

押合ふて乗るか浚りの習ひなり

法ましめるとなんの武士ても

世句や理屈の頂ぐといひんこと故い押合ふて
乗るか浚りのなしひなりといふこと理に法の

されは七名八躰と定まりたる上も
よりひろけれはなをさらしやうさまさまなれは
尊ばれぬ句ありとおもへは此すなはちの大事なる
あまりて人を挽きるすなはちなるへしされはこそ
すなはちと一歩に里の俳諧なり分別なり
せるすなはちなれは是此すなはちもなはちなれはその
分別とよなりて名人のすなはちなはちにてなくも
およそ此なりしと云は書の第九段変
化の論に見るへし
○かくのことく我門の学者達は第一に俳諧の名と随
ありしん第二に俳諧の法と式とをとりやくへからさる
ことを伝て習ふことを心得て後に論学に及はんこと
をしるへて
象識云伝に曰無一段の骨節ありて而理を評論
の清らひよりすなはちの温和に德を修しめるをを
我門の大事なりといふは俳諧の内地と雅
まなふしとそ

第四虚実論

○そもそも俳諧の虚実とは別に言語の設あるにあらす
と説明の両輩にしてそれそれの変化をあらはしたる

志かれは虚は実とやはらけ其実は虚を補ひて
いづれの君にかかしくなるん世にいふ儒書は実学
にして仰預は虚誕なりとて人は勧懲の先後と
ひきまへは言端の虚実に属をもくて実はよき
あとは虚はあしおもとはふ世情の変とおもふ人の
いはなり

衆議云 [illegible] 君を説ふ虚実を両翼とすれより
下は文に釈迦に馬麦の実とて孔子牛刀の戯
あり是既に儒仰の虚実を両翼として世君
を説ふなりんと用てアルカ君さも我当にけ

[illegible]の一巻に虚実の変を説はるあり其
句は

やはしんなるてもん口公

庖疾に楽麗ふ泉のうしやはれ

此句いこと仕と庖疾のアル也とアルれいまもはあ云
斗の接なとも尺ゆりそれは器量をとう
やまはるそれ庖やまれ親ふなり志かれ右のお
さ三句も実情の所合なれは実はこと虚の句
あるべしとて

いもやまれ出し合ふ泉おうしり

と此虚にあたれる實をとらしめたる仕のきらきら
庭鳥とあらはれたるやうにしんをすてゝにつ
かくことはけ殆ふるしの詩抄より言語にて
情の實と知るへし或は抄を佛の十論會に 十論會ハ城南大善
精舍ノ境内梅花佛ノ鑑塔ニシテ二月七日八月十六日法恩ノ會式アリ 献立のみ菜とせしなり
るに

折るまより世にふくはやきを厭ふ

といへるは法會に採菓汲れの實とおもひ世にふるの
籬来と口をはしらるをとる信施財施より施
主の程くと思ひて

金抄は極めてやくのわらひ

といへるは年やき庭の虚實なり虚實は事
をはしらせしく何にはすてもいふてあるへしとも
○此故に吾等は仏諧といふは前のことなし上手に迂
詐とはくるしなりとは例に仏諧の端的底にして虚
實不自在の人には知れはしき芭蕉門下の一振刀
なりけるいへ虚實にはいまはらひもあれば虚實の虚
實口傳といふてすと仏諧の名は一大事とすへし
愛儀云此和の口傳は此仏諧の奥旨なり傳解及為
辨抄に詳なり熟讀しくて智をしへきてすしなり

我党にても一両年の虚実自在にきこゆる句ハ
まだ実情のうへに落てそれより一句ハ其意に
あれとおもひ入るに其道也此処ある人の誤
さしあたれどもともに有りつ両方を掛
此句にて中寸ならずやうにしてそれぞれに子とも
も同意の例の本懐と景樹に虚をまうけたり
書るを虚也とまうけたる人是を子もしにあらてにハ
まへ次子ともんそのあるへしとつ見に虚也とまで
へるなり又ある句に
濁りきれぬ評もあるなり

といふ句ありけるを其後の作者の心ゑる此句を
字へまうけて中へ其を其様の評をよくへて濁り
酒を好みりのもののいつれに評もあるなれハに
盃をそへるを一句の理字へねじね句も附るしと
是虚実不自在にして俳諧の言語の拵れたると
ぎれこそ理といふ妻しきに似たる一分の理
余より其句の虚実を叙くるあるハ此句のお
うしきもの評の相聟も相婿にもあるまじの気
を濁りきれぬ評もそれ例に言語の拵れずして
附句もよくよくあるべしとぞ

○けきよしきろに先はありきゐに始終ありて
出るゐと入るゐとをしれいきゐ虚の名をんよりしも
きゐ実の隠あらんまゐ口傳は語を我家の讖文に
して

愛護云此讖文いふ毎百世の為と宜へるとて口傳
のまゐを傳及ゐ雑抄に考合すべし又同抄に
世の中の人れんに実を出るゆへに行ひやすく
虚をもしるゆへに殺きくしとて我堂にも
きゐ虚を例のおりしをとしきゐ実をさひしと
してきゐとくを人の歎をこゑし人の嘆を

此慰めきゐる言語にその時の用あらんとき虚
のふくをあるといきんて律義の能諧におりしをと
けられんにハ諫に此讖文の表裏をとりきまへを
といふ事しとを附合に言語の表裏を議する
中に

いけもちとりの早れ市る
業るのをれ息子まも親ん
此句やいけもちやはといふ言葉にはふをおそれを
をの裏を知りて趣向をも親のおそきを業るす
きゐるはまゐり或ハ寛濶と対称とを議する

古句の二章あり

主のうちんを踏も思し

阿房に為りて言の葉に入る

けれは踏もおそろしの身揺なる阿房にあるての

にくこある虚実に訊諫の二用にしてこれに

より抽にあらりて其時其場の設にも其入る不

と出る不をしらんなら虚実の用の危きも隠る

るも知るへしとそ又東花を師のむうしに国

り御の時宏智法市肉身の像に二章あり

あかさふと落ちも生へ次文の山

と申侍之句の姿力なきやうにて此法市にあるさ

むうれんも口おしかれとありて

六月に雨鯉おうゆん鯛よりも

いやそこに色相をとゝふれ出る枯木寒巌の風

骨を作らけんや宏智法市を越後国野摘村に

有法市亡命より四百余年肉身の像今にあり

○此なに吾等に虚に乗るく実をおこなふへし実に

乗るく虚にあそふへうれ

衆議云佛諧に訊諫の道ありて虚に乗て訊

諫の実を行ふ実に乗て言語の虚を行ふとも

おもふへからざる言語に虚実ありとしるべし
君父といふ尊者に例して作者の諷諫を見るべし
此の折にあてて諷諫をしらぬ時はそこをしらずして
直諫によくへからんを直に諷諫なり實には虚の實
あるもそ實の虚あるもまるべし　或時の附合に
本地を云ふに由のあるを紙
笑ひ尻にもらふも伯父ぬの叱り役
此附合をおもはゞ虚と実しの如く人とみえて後句を
それは家をまとめし一家とし伯父とし趣向をたてて句
作りに虚實の説あり尚将その虚實を識るに
前句やおもはる人の不肖をとりておもはれたる虚に虚をく
たりてむきの叱り實とそへの哥らん例にならぬの句ぬ
うつくしくそのうちと虚にあるとりそれて實
に此りのきりしうんにそいうりのかへりうりてて
をここに側あるぞの起想となふ三句目の作者は
逆句もらゆりなうんとれ或そいふ此要議や容易
なりねその内心のおうしきを虚という時は是白き
の實も又虚なり虚といふんとそれは又實なり
そこを間に敷衍といれも虚實の虚實としてるまに
露れ知るべしそを又向ふ人そうまをその内と

虚にもへしかれも虚いうん答もて虚にて万物の変化を設く為なり内よく虚なる時は喜怒はなしに生死苦しまれも虚より変を生しこれ変を虚に設く虚実の前後に道をやはひて以ふの変化をしるさんや此段の事に至りて竜居士の遺言あり それ言は仏諧に虚実の真旨に加ふへる也へこれをもて東花先師の言葉より傳ひ出す由へし而なり

いはくもてるしは解ノ賛にあり我学志の衆議にはその遺言と投子の話則ちと考へ合せて師事に自信と所謂との訳ありて繁多れは爰に

略も十論に邪て言葉の徳言をもて東花先師のこれを説不なり此段等に言葉の言多しけれて爰の一斉は白馬の法の第一義ならより爰に虚実の方便を法らして虚実の論は此一斉ならしめ

等に書を熟讀すへきやし

第五姿情ノ論

○また仏諧の風姿風情とは其所に古今の差なあ

れなり古風は平にて情を学て言語の上の姿をもてちへは今様は同にも姿をつんく言語のお

の情を合心志かれは古は情のみにして今は姿の

論と志るべし

愛議云 傳ニ曰此篇は全く天地に三才の姿を作り儒仰に文章の姿とあらはしたるあり文及為辨物姿の論の下にアんるべし

○謙や今の俳諧といふは古代の鉢に姿とアんさしめて其は全くなきに似たれともさいしき風情をその中に含める風雅の餘情とは以ひ也

愛議云 古代や鉢花四むきの音

詩く其姿の形我そらも例の情を先にもたる人ハ平にも句の情を生てかりて姿を志るべしる

なるん我者志にも姿情の論にうつくす辭す理なるありて或は言葉の句も情は先なり情を先にせられは能き句をかなしまとへるもありしか今はかしむうし言葉連哥師如理能順に命して句を見るに能順の句に

秋風は薄似ちるタアル

とあり言葉の曰此句秋風にと志るんは俳諧なるべしと愛におのこく能順連俳の正うらあると称せられしとは連哥は手爾葉に

情をぬくに他諸を知の姿をあらはしく情を
を姿に志ろふなり姿を先にするは蕉
の法基なり
○此なる吾義を平とかして他諸を少へ見る目を
かして他諸をつくるへしとつくる耳目を姿情の法
なりのかして彼に門陽の法なれあれも法れを
言語の姿といふをんわぬくもあるへはれとあらを
しとしふ時を両袖をまおして首をちゝめあら眉
しとしふ時を片肌をぬおて膝をまくるをを下
不の姿とつくるをあらとまくる助語の変也

衆議云或時我師蕉門の風姿を人に諭る句に
平に少深しさをして柳れ
同他諸の意を諭る句に
ちるけをちけて抵ふやむに餘
二章をお文及の辨おそ差万家の下に居へ
合をへし又嗣兄五竹居の句に
寄そふにしく立居る筈ゆ
此句や五竹居の夕を色にそこに筈のつくるやうなら
寄そふにして立居るとの不のかにおりしき不
あり蕉句を此等の境をわきるまし〳〵ゆ

都てきてきらくといふを蕉門の俳諧とおほへ
此姿の大るをいきまへ其味のきてるしと
なりて彼今国の口拓子のこまて風雅の心を失
ひきりにひとしく蕉門破滅の御法なるへし
為辨ず年月明暗の下に始て俳諧の門に入る人は
第一に意の境界をもふれ第二に年の字向を
まれへし今いふ俳諧の智と不智とは年月の
功を論ずるにあらず唯一念の誠なりとて此俳
諧入門の志めしにして古俳諧始終の義なり
是者人を推量の智をもふれて外に求まる所合も

きてお句の姿を目にみたしむるてまなりきと云
お文のあらはしとのお句あらんにて苦楽の姿
とすにおよかれくやくを汗肌をぬきて膝をま
くりきりて下界の姿をみるかことくなるへしかりも
お句へむかふ可愛に何といふ思ひは早くお
句の姿をみるへきなり思ふもみるもんなりと
を一念のお後にて千里を隔る大るなりとを
同お一字一點の下に一句の姿二句の姿乾容の姿まて
く祥なり雖にみるへし
○志かれは一字一點より附合の姿もかはりゆけは日本に

おるし他語をいふとも古いとゝいふるもあるへきやはなるに
温故知新の四字より今の他語の師たるすをしるへし
衆議云為辨所温故知新の下に此語に我と推しく
人に求めけるなるへし此を以て何を行ふに人此
心のごとおりへに古に飽く新きを求む飯を食ひ
ふるを吾むか行てすらめはしきやきのふの古
きもけふの変に應して其用を設ひ日こに新
なり志れに変を知るを毎日の師とすへしとあり
温故知新の知を智変の用とする其物に祥也
永豊の衆議にはこれ四字を諭しぬる物子

庵の子等に名月の句あり

なのうちも君にはなれまじ今ふの月

譯にけふの月のむかしより此古しまるも愛に
此句のあらたなるを志らに姿情を新古とひ川あ
ちりとも新古を言語の重ける為といふすとも
知るへし凡此語を建門の至論なり故て傳より
虚実の論に至りて其を伝き此語に合らく
他語の辨とあらはし始て風雅に詩斉連俳と
四ツの不とけらむる不を知るへし或ハいふ詩を
斉の優美におよひ斉を詩の諷諭におよひ

とそ作れとも詩に和さの優美あれは齊しに
詩の訊諭なるんやおよりけるにも得るにも
しく爭ふも家の建派なるんしかは俗語も
その得るにとなりくもの文の俗とを語めさ
らんや

第六 俗諧ノ地

○なしも俗諧の地といふも殆のるまにも專地といひ深ね
ふも下地といひまして今様の訊ねにも地といふねあり
節といふねあり曲もこて中の変れなるん
愛議云ゆ文そより儒仰の大道に勸善懲惡

の地れともて俗諧の地と謂ふる殊にしるへし
○作はいへ節のなるんも我家の風言(ヨソヘコト)にも結構人と
あさ名して例の笑ふも俗諧なり節は家くの
骨にして一ろ建立の大るとは知るへし
愛議云為辨抄結構人の下に天下小君と天下の
師との孔孟論より節は和中の一節なりと
そてる事しねに俗は地に曲節の一節なれは
後輩の中まとひもあるんか節は假令は三條の
法にあるおうしくあるさひしく二條は風
雅の拒優なるんに五倫の常法の一條は世法の

一節ちかくに知りくし愛にいたる地の地形と
えまをいて曲節の一節ちかり志かれば俗語の家の
一節は知変の節と知るべきなりむかしあ
席に蕉門又他つの俗語即ち変りまるを
是れ西鶴なるにて之の格也といふ難題を出
しこゝかりくの曲節なる中に蕉門下の句
　夏は荊る茶は摘む之の格也
といへれば一座の人は笑のむつかしきに困りて
あるぬ曲節の造作を恥じ今や之也世紀
色ちるとかくもやうにうよと感しあへるとそ

愛に知るべし此作者の俗語にて何ら曲節の
難かるべきを場に人の時に至て俗語事話の俗
語なる蕉門の一節とつんせきりといふべし愛
おのくに節のきれ時と和を知り曲
節に好るの人をおとろかれと世界の年に
ことぬ事言俗語との作りひとも知るべしとそ
○よして俗語の地といふ事なり俗語事話にて
それは雅俗の作りひを志るを例に屬愛のあつかひより
例に風雅の作りしこゝろをいふに今の世の媚に媚を
かさねてく

変儀云おほよそ詩哥の地をもて実に俳諧の地と
説く人は地は俗談平話にして是も俗語の雅なる
事を知るへしされは謎に似て俳諧とはいは
常の心しとこそいひてさとされんや是
されハ此くし大事ありて俗談の俗にあらさる
所は有に虚実のあはひありて都て世情の
理屈にあらは風雅の道理にかなへるもし
去らハ其中に虚実の論ありて是を場に付の
言語にあらはへし其弁は曲節地の三断を
句作にありて趣向にて示し此由人に地をとりて知れ

曲節とは付に自在なるのみなりてそれは祇空の
変儀とは其州の発句あり
いとみては意にかなひて雨降
此句や其語にして一字一言もかさしれを後の
閑寂をまくはせるにいへるからかくともいはん
其の事に隠れて雨経の心むしろそこにさへ
しかもおよそも風雅の心はいむ心にして富
貴の人もこれを愛し貧賤の人もこことを喜び
又倒に智愚の気ありてなほ道に三條の法も比
ちうちなんとえ為辨おほよその所存ありて

椿の色を奪ふ張ねといふお匂に地曲節の附合
分ぬなりを不別者の下に俳諧の葉方といふ事
ゑくを張ねの附合にむかひて其積にそこに咲て
を人を愛に立りて家居の法も身帯のよし
あしも一眼界にうかむ事へに尾の鰭のとてあ不
するにおよひ其所の姿をきやうにいふなりとそれ
地の稽古する不多句ありて根よりを老の附合
こゝに地のあ方にて他に求るなし志かれ
家業の後輩にいふ心切遠ありて例のお匂にむかふ
時愛にて何をいてやうんとお匂の姿をつんはさめ
を

まおの心に法じしありけれ千桔の不に何やらの集に
ありしかと例のほかぬ集のおりむきなるとりて
ほくれにを匂にお匂のあらりへもらんそのお匂の
姿をつんさまあらはりを紙向お匂の中より出さる
なるし常の稽古のこまかに附くるをとるを
撰集にほかぬるとする為なりし或を集の
俳諧に道を出行むるあらしく道をなるあ
らはとを出ろむるに為るろ理なれと道をな
るを先にするとひろむるすを先にするの也
なりほかぬるとするあるとて下手のほかはる

句にもあらはれ趣向のお句の中より出れいたるが
るしるしなしこまかにはかさらに曲節のあやなり
三部の附方の詞句に習熟すべし
○雪は人間の地を論ぜば四首に飯くれ茶をのこて「君
父のおのれをもとれば男女の中の交をさしへすまして
月雪花不とくおれの風雅の情をうけてもとのれと
こそもとに及ばんばれと此時の佳節ありて節供
三月は詞をあらはせ鞍入嫁取の時なりしこれ
深細の模様もはねよりもたをやうに人に對する
詞にかひのもとし媚ふるもんかくかんん

要議云此は他諸の地の要用なり此地をもなれてそふ
あるし次の第七第八の二論は地の修行なれば熟讀
して此篇の地をもとけまれるし修行地言行の
論の要議におのそれ修行地に行脚の時と此言行
此論の分析と此我堂の要議のおふくは理解と
ちなと思れて此書にて二篇を欠く但し修行地の
本文をも文にちらひて世に他諸の文章をそふ
此一篇に透得すべしとあり言行ノ論は遣得
の五秘の論もあれば對に二篇を熟讀すべし

第七修行地略

第八言行論 略

第九変化論

○其も佛諧の変化とは世法に今日の心得にして万物の不定を悟るべきものや大いなる時は天地の変にして雨によろこび風にいかりまたは花とは枯い葉とちれ小さきなる時は人間の変にして君をおうして臣をあかまへ父にはむきてまたしたがひきけふは南殿のどにあそびけふは小邨の家にかなしむ変化も天地のほねなるをおとろくは人のしらねばなり

爰に佛諧の変化を論ずるおおいなる物は古今の変にしてまこしきなる物は一世の変也

衆議云僧に曰此法は其に想論にして人天の変化に喜楽を忘れさるなり儒師の説なるに其世法の接嫌を知るべしとあり尚佛諧に古今のけうらして百韵の変化の分明なる三法四名の委細なる諫にお文の教へはまたを見て引くとく此法に永豊の衆議の所に用なる何を衆議にて出ぬ事をやまゐく後世の不変あるおもの答へを出るなり

○此れはむかしの誹諧は始中極の三ともして昇のことく

屋とまくまれた例の俗にして雅なるは今の俗語を
始終の二口付をもて中に風雅の情をおもり
衆議云後輩の心へるは此頃の俗に
「五歳(始)内に 隆(中)志る事や 清(終)めて飯
「古(始)ぜや 詰(終)迫(終)じ事の 言
昔の俗語にて三ツと清くせる此外に人の中へき情が
し深いまして いかくの事をも深めん今の俗語
の事一をおして中にさひしき情をぬくゆゑ
少なあり此中をおもしてあるは省くてすにやむらい
今の俗語に一句の中に物三ツあるなはその一と

そぬくあるきや先輩の口志ある頃お書と熟讀
まくしていふもそれらの篇和のまゝめ為ある風
の理といふことそのことく五歳内と此ら五器槐の理
をかけより志る事は飯の理あり清ゐに清めて飯
と一所の理を清められは風雅の案情なくいとも
今の俗語の論に及ばるるなり物に始終の二ツ
あるは自然の理ちなり今の俗語はつゝみ物ゆゑ物に
清けそれをまく様にいへは一句の中に物いふ所あ
るともそぬくといふるしをおし昔言葉と君
まゝ東武行の鉄刑に

梅の葉にはりこの君のうたけ

此句は梅若葉の始ありて鞠古のうたけの孫と知り句中の和とはぬくのゆくなきを知り旅行は優游の余情あるを知るべし古代の句におぬれ

さけしきていふ情を以て孫をとあるに知るべし

其此孫をといふ中を略するも当れの言口訣

あり志門名此しかへしく余情を知るべし

或は向此詣は貞徳より宗因におゐるまで始中

孫のことをいふとする孫をしめて始孫二ツに変化

しも道をひらきぬくるを東花先師さんを

傳へて善く世にひろめたり阿誰話集に（此集ハ始中終ノ中ヲ略セルヲ又始ヲ略シテ行過ノ集ナリ）始孫二ツのこと始を略し其始有

孫の此詣はなんそや答此ありはかねて我当事に不

変あり抜きりに始孫二ツの此詣に不易の道を

ふまえる為滅後の変あるものを案情の論定る

よりも変えて世にしたしの

宗道の物数者とは或は口ぬりとは其風のかなり

まるを遠なり獨り阿誰話の変におゐてはそんと

害するはれは為頼文集（阿誰話ノ行過ヲ地ニ戻リタル集ナリ）名利

の解に曰はれは天あり地あるがゆゑ物に始孫の

二ツありて其中に人間の種類とはられ給ふ
凡月にもまひ斉人にどうに拵ふ殆ちに
て殆あんともに世積分和のかうちくにしく
佛尼の家の面目坊ともいふ事しとありそにより
こくそとおりへに蕉門の俳諧も世を人の智解に
まかせて右の行ふあんかと阿雑話の住まい変
しこく桃子庵に此一類向を立てをのれる
の罪を我と我身に帰し懺悔の一帖ハ全く
蕉門に百世の為といふ事し和尚にも長雨
吟の未来記ありて未世に和尚のいましめ

ある者合せて知るへきなりも
○此所に吾等は類向とはらるゝ法を立て其五箇の
一條とはなせり
衆議云或問為辨桃にそる事の所句を誤るあり
て
今もやる草根織り と云はれ立
まりの雑に誰もかくなる
此雑の一字うつ法の迹とはおもふへからはとあり
吟の迹とは道句のんにや若志かはうる法の
迹とは誰といふて我とまりしを知り此ある事の

所会ハ春秋の説ハ題向にして隠るゝハ句作なれハ
吟の迹ハあらはれといふすやしかれ月次の雪
お句のうこ法の説あり

首句に解ふく魚をあふれ

祖父様とこゝろふいふハ嚢てあろ

此句を中ゝる而おうしかれとお句のうこ法なり
其様ハ一解ふく時のすをいふて深なしお
句をこゝろしてつんれハ一句立て一句を立てう
こ法の難ンと道んとしたるそれをうこゝろの迹とハ
いふなりせしくハ右の祖父様の句を

祖父様とこゝろふハ誰もいふの答

これ此説のこゝろハお句のうこ法を道れ一句を立んと
するなり言葉の説のこゝろハ勿論法ふハあらはれ為
辨ずに此説のこゝろにはなて題向と句作とのるす
はまひらかなり或ハ向右にいふ首句の句に對
て祖父様を題向に法ふめせしんハ如何答せるハ
題向に才一の替なり題向ハ道理と理屈との差別
ありて理屈なるハ題向とすれども題向立ハ右の
節句に解ふく魚をあふれの句をつんれハ首句
の解を今日の素魚になふるをしたる律義

あり也入りしかんへくも庭に年寄も内蔵もあるめ
と云ふは中庵の女と趣向とはしらしへきやその
中庵の趣向なんハ節句の辭にはれるものあり
ともいふへし又或庵の衆議に
也し入れのお花も茶のうらうへて
法すに答る時の祖父頼
此等や祖父頼の趣向のよろしきてふ事とそ
且趣向のすゝは儒師の強くより都て書籍も
文章も趣向を先に定るゝ為辨ず趣向を法
あるゝ下又同ず執中の法の下にふんへし

或は同九五條のすゝ十九條に裁所ありて
古今抄に出（古今抄全部五巻内三巻貞享弐二巻八東花弐蕉門ノ俳諧大成ノ書ナリ）然て六
條は十論に教並ましとなれハ今は九五條の傳
ないおよハ法ゝる答志かり古今抄の十九條にハ
三校をもしやてあり十論にハ傳を發ましく
し今此に傳ふる九五條にハ傳字の誤多し
○かくしてもおそうつきは有心附のやうされまして此
所方にハ先手ほ手の論ありなより他説の事方も
碁ハ碁の工夫にかゝるすなしさとくいなの句此
横ハ如て大名なれと碁におもしきありとあらんに

おもハ高人へと趣向をと作りなして積もあく所に景気を
句となし此ハ高人を先とふして景気を待にあり
愛護云後世の人ハ高人の趣向を先として
景気の句作りと後にするを有心附とかき
られ都て附合の私あり作りと有心の附合に
先ぬ様にの論ありとてすいハん着有心附と
此文にあることくにすハ句の響情と見
あつし一字の手爾波とも味ひ染れと有心
附とつけあれハ有心附にあれるかくし難に
見れあへて論きしかのあり其の中をすてれと紀

先ある先にして後にの論ありとてすいか也此文に世
間の附方を先にして景気ものと早まてまくしや
句作りに高人もおりひよりよく内眼の師にお
後の理の事と知りてされをお句のうとまりと
雑にもとありしお句言語と説くに深と人
其のあるまうしお句に云れて恐れ入田舎
人と其るあり其の景色のと其の情と先は
後に高人也いよしその高人ハ空しく情より也
此ハ理のあらて趣向とおもしろき句はお句の味
ありと雑にもしあり有心附ハあらすの才一すして

附合の基本なり故に何れの附方にも先手後手の趣ありと知るべし此段に有心附のこと

四ヶ所にありて中に第一に有心附といふは和平の有心にして無心にも對せるとありそれの和平にもいふ事もあるといふは分て有心附といふ

あるかことしとなり

○此て其席にのぞむ時は衣食に一日の機嫌をもつて多は泰山のまもおさまりしは流れの風志川に附合の三法をかむかふるにも及ぶ又所十所の細注にかゝりて例に無分別の所より初念の趣向に出てよふへう

次好きにて其日の仕合にして悪きにも時の不運なるん

そと虚実の虚実といひて十論の究竟を分の変化なり此れとも一座の調子あれば殻をもやくにもふ川へかゝれば出るへは兵法を学ぶ人の右轉左旋は平生の義云なりして敵と敵と此時しむかふ時は氷の刃をぬきてなりして其甲ぬる川に切割るに志れば愛を志らぬくを殺に文武の好不にいたりは十論をかへて脚手ましひとなるん

愛議云所に三法も七名八所も有るにおよひは十論もかえ川にて足手ましひとなりて其所のんは

遠もあらんか兵法を学ぶ人の右轉左旋のことく
佐諸も其生を稽古あらはれる甲二可に切割の附
合ハあらはれて其生の稽古に加はれる其所に
いたらは所以なるとなるも其分おまて出まるもの其
分おまいあらはお勾に對して向ふ和そ出ふ後に
分別ある時は附合のとくへ天地懸隔もそこに
佐諸の極意あると知るへし或日画一庵の門に立置
頭拵ひの二角えじといふるをとるをつんるに例に立
部の帯より帯をとらぬて五六人もうしし所に
はなかりまるにこなるより獨り立向ひて見て

見せふとあたをかくれはいひとつかて背に
かうふてたるに佐諸を諫まるにより風よかりは南
て。えて見せふとつふに。えられまんとは所さるやうにて
所さるはいかにと兎角分おまり内にその二角えりの
数を遠まるりて思ふにあり。えてつんせふとあたをかく
れは。えて見れと答えりそこにて毫髪のもきなく
お勾へ附さるるをおぶへおの附と附さるとの分
おまを髪の法めさるうことしし一分ふ思へは此所の
其分おいは早意人稽古にはなるうしとはふれさるとの
大るまにしその此分おまに此分おありといふへし

第十　法式論

○そもも俗語の法式を連ぶ所の家にいんちらひてを
尓遠波のこし合も艸木鳥獣の去きらひも一座一
句の物を二句と法るゆゑ七句ある物を五句とあし
五句ある物を三句とあし三句の式は二句より一句にも
ぬけりかより重曲の掟まもろをおこそかならん
ようとおもひ法をやそうらんてうとゆふとや
法て一座を平仙の法りひより五十韵といひ百
韵といふ一部の式を百韵に志るへきやし
愛議云道に三條の法あり所合に三法あり愛に

一座の法ありそ法を都て石のんをあらはし
その物によりて定むる所なれは此法は何ゆへと
心をかへしそ其なと知るへきや此源宗近
利者執筆の法より答應の式にいたりて容と
辛さの心ゆゑてあとしそ知るへきなく理と
してあきらかなる法なし俗語の序を
かくこそとこゝかれ品を序に除めるゆゑし
都て十論の人として道に勾引する文の
妙不を知るへしそ世にそんぬるあり
懷我も古法の横関にして素人なりに志る

もちんくしゝは出されを裏白の大根別ちゝ
此或は色の座にいはりて香を焼くちゝいふあり
これらは仇俗の中不仏下に風雅を導く為ゝ
るも此法は何の為も諸に志ゝぬ法にして
論はなきにあらぬ事なるべし
○此て人々の附句あらんに才子は附心の為理が理屈
うと学ばけく附句の趣向を称せへくお句の場を難
すへし才子は三句の打越より四十句のそこいを論
はへし四折の変化は勿論のるもかなるは前句の
面白さに為所ありけれ

愛議云此所に拝にかはへきるも四折の変化は
一巻の様相の同しうさるさもあらむより仇
諧は百韵は百変あるへはれは人の尻馬に乗り
同しるといふ須ず前後をみそうんて其
場を付の用をかへ趣向を立る所に其変化を知る
なしさもとくは月の座にて其句にお句の元来
とすこのへさもらんに三句目の作者は打越しへの用
をかへく趣向を出して其月ぬりを取るべの用
にはりて其句の姿をうらあへさもらんかことく其
姿に志ゝらひて其の変化は勿論なり此に附和

の変を議せる書の初折のぞに
志うり次においてもそごとを習ふ
唐さの留ちとつゝるいろん
一枚のぞ温人を哀のお
お輩より難していふ此句を尚句のおもし
ろきとこれをてお二句の附意を轉せる趣向に
働きあし其上附不の変をいひ初折のぞの位
にあり次と例の趣向を作るべかへきにおもり句あり
吸筒をぞにもしきて二人りほれ
其座に此句に定りぬ四折に附不の変のてうに第七

修行地のお書にあり
○此に客舞句といひ亭を眠といふる法をとひとく
にはいふ屋うし次舞句は客の位に似てこれまもお
不つうるく調のおにんとあまし眠を亭をの働に
似てもんあるうに舞句の余情を調ふる有也眠の
韵字も此御法に志るべし
貴儀云舞句眠に客と亭をの不あるを客に寛
先て舞句はるりの眠を亭をとひとくまにおもふ
屋うれとは都てこれ法のかたけやしき有也舞
句を客の位に似てく眠を亭をのんに似るをも

いふなるとそ是舞句を君位にして服に居る
古今抄に曰服の韵字とは舞句の余情の言外に
あまりて言葉のきこえぬ不を補ふ法なり一二
字の趣向を立て上におくとも中におく時もあ
れと韵字をもといふなるは例の名目なりとあり
志かるに此不のむ文の見遠へてや服は舞句の余
情を補ふとんはきるあり余情とは言外にあ
まるなり余りのを補ふといふなり言
葉のきこえぬ不を補ふ服の習ひなり韵字に此
ましたる辭抄舞句切字の下執中の口傳に居ふ

屋さなり

○かくしても我門の俳諧即ハ俳諧を俳諧のよしあしにも
あらん俳諧にあらも何のゐちるや法式をあらも何のあらる
やとこそ人をあきらめ此論をとうめて平語の中の風と雅
とを志らハ人理も理分も今日の戯にして虚言をも
をのつから風雅の事にかなひ姿情をとのつから花鳥
の和にあそハんそ人をよし俳諧をまふひとくきとく
鳥花の字を志らしとも和漢に滑稽自在の人とふ
屋し

貴議云道徳の二篇に虚を設き法式の一篇

に実をとくあふとあれば此時を始終として
仏諸成就の不とを知るべし法る猶文にいた
まて仏諸は仏諸のよしあしもあるはまと
ゆゑ理と理分も戯そと虚実に十論の
理をちらして凡言雅語の二つより姿情は
どうの和に抵へる抵の一字は仏諸のお懐也
ちは又十論に十箇の要文をあけて孔子に
真秘の歎息とゆゑ達广に楞迦の密法と
ゆゑ都べく十論の不可思議なる我聖の要議を
ゆゑにあらねとかりそめあらぬ所命に

よりてかくは一座の要議のはしらなきお書
為辨抄の他句にもなくそく我堂の句をよし
へきる驪珠に奥目のせとくへまして知るに
ところちらんとそ法れと我堂の人とそも彼
後生を思るべきにはまた竟んを主人の為にて
明服の要議を待ゆき為也

明和三丙戌年
五月中旬

一嬉菴

書林

京寺町押小路橘屋
野田治兵衛